

小学生の英語受容語彙サイズ

—外国語活動・外国語科における意図的学習の有効性—

江口 朗子

English Receptive Vocabulary Size among Elementary School Students: Assessing the Effectiveness of Intentional Learning in Classroom Practices

Akiko EGUCHI

Abstract

This article reports an empirical study that investigated (1) English receptive vocabulary size in Japanese public elementary school students and (2) the effectiveness of intentional learning of vocabulary in classroom practices. For foreign language learners, vocabulary knowledge is an essential component to improve communicative competence. In response to the designation of English as a formal subject for fifth-and-sixth graders in Japan by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology in April 2020, a guideline was provided stating that 600–700 English words should be learned through communication-oriented activities. In order to establish clear learning goals, it is necessary to grasp the learners' current status. In this study, a total of 158 fourth- and fifth-graders performed an aural English receptive vocabulary test, with results showing that the average vocabulary size of fifth-graders ($M = 522.78$, range: 300–780) was larger than that of fourth-graders ($M = 383.02$, range: 140–760). Further, a linear mixed-effects model analysis showed that the implementation of intentional learning, along with grades (i.e., fourth vs. fifth) and loanwords vs. non-loanwords, had a significant impact on vocabulary acquisition. Some words, however, were not easily acquired in classroom practices, presumably because of homophonous difficulty or low-frequency of exposure.

キーワード：小学校英語，受容語彙サイズ，意図的学習

1. はじめに

外国語学習の本質的な目標は、外国語による情報を理解したり伝えたいことを外国語で表現したりして、他者との円滑なコミュニケーションを図ることができるようになることであり、学習者の語彙知識が発達することにより、外国語によるコミュニケーション能力が向上することが期待される。小学校では、2020年4月より5・6年生において外国語（英語）が教科化されたことに伴い、学習指導要領（文部科学省，2018 a）には、中学校での外国語科の土台とな

るために十分な語彙知識を身に付けることを想定して、小学校の外国語科で扱うべき単語数について具体的な数字が示されており、児童の英語の語彙知識に関する実態調査の必要性が高まってきている。

本稿では、新学習指導要領（文部科学省，2018 a）への移行装置期間において、小学生が英語の単語をどのくらい知っているかという語彙サイズの実態調査、及び外国語活動・外国語科における言語活動を通じた語彙の意図的学習の有効性について検証した結果を報告する。外国語に慣れ親しむことを目標とする外国語活動から、「知識」を実際に活用できる「技能」として身に付けることを目指す外国語科に移行する中で、児童が持つ語彙知識の実態を明らかにすることにより、今後の小学校外国語科における語彙指導の実践に有益な示唆を提供することができると考える。

2. 研究背景

2.1 外国語活動・外国語科で扱う語彙

2020年4月より、小学5・6年生では外国語活動が正式な教科としての外国語科（年間70単位時間）に移行し、小学3・4年生では外国語活動（年間35単位時間）が新設された。外国語活動において求められていることは、英語の音声やリズムなどに慣れ親しみ、日本語との違いに気付くことであり、語彙や文法などの個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼は置かれてはいない（文部科学省，2018a, p.29）。これに対して、外国語科では、受容語彙と発表語彙の両方を含めた語彙サイズとして、外国語活動で扱った400語前後の語も含め600語～700語程度を指導するという具体的な語数が示されている（文部科学省，2018a, p.90）。さらに、中学校の外国語科では、1,600語～1,800語程度を学習することが示されており（文部科学省，2018b）、小学校の外国語科における語彙学習は、中学校での英語学習の土台作りとしての役割も想定されている。

2.2 外国語学習における語彙習得

語彙知識は、主に、単語をどれだけたくさん知っているかという広さ（語彙サイズ）と、ある単語についてどれくらいよく知っているかという深さの2つの側面で測られる。このうち、語彙サイズは、子どもの第二言語の熟達度を推定する指標としても用いられ（e.g., Bialystok & Feng, 2011）、熟達度との関連性も調査されている。例えば、Stæhr（2008）は、デンマークの中学生の英語語彙サイズとリーディング・ライティング・リスニングとの関連性を調査し、各技能のスコアが語彙サイズと高い相関関係にあったことを報告している。語彙サイズテストは、比較的短時間に多数の学習者に一斉に実施できるという利点に加えて、言語の発達指標としても使用できるなど汎用性が高く、これまでに日本の小中学生を対象にした英語の語彙サイズテストも開発されている（望月，1998；Sato，2017；佐藤，2018，2019）。日本の小学生を対象に、文法性判断課題と模倣発話課題により英語の文構造に関する知識を調査した江口（2020）では、佐藤（2018，2019）が開発したテストを使って測定した小学生の語彙知識が、各課題の文構造に関する知識に影響を与える一つの大きな要因となっていたことを実証的に示した。

一般的に、語彙学習には、リーディングやリスニングなどの活動をしながら副次的に語彙を身に付ける偶発的学習と、新しい単語の学習を意識的に行う意図的学習がある。しかし、これ

らの学習法の間には明確な区別があるわけではなく、語彙知識の習得において両者は互いに補完し合っており、ともに必要不可欠であると言われている (e.g., 相澤, 2014; Kasahara, 2017; Nation, 2013)。一方、Daulton (1999a, 1999b) によれば、たとえ日常的に英語を使用する第二言語学習者であっても外国語学習者であっても、日本語母語英語学習者は、日本語の中に溢れている英語の借用語に恩恵を受けているという。

小学生は、成人学習者とは異なり、授業外で自分の意思で英語を読んだり聞いたりする経験は多くはないと考えられるが、借用語、つまり、児童にとってのカタカナ語は、日常生活の中で自然に触れている言葉であり、語彙の偶発的学習に近いと状況であると考えられる。実際には、日本語におけるカタカナ語と英語の意味が異なる場合もあるが (星野・清水, 2019)、こういった意味の干渉を相殺しても、小中学生の語彙知識を問うテストでは、カタカナ語の正答率が高い傾向にある (e.g., 笠原・町田・長田・高梨・吉澤, 2012; Sato, 2017)。外国語活動における教師の発話調整を調査した研究では、指導経験が豊富な教師は、英語で授業を行う場合に、日本語を併用する教師よりも、カタカナ語の発話のバリエーションが豊富で頻度も高かったという分析結果が報告されている (Eguchi, 2011)。

一方、小学生が外国語活動や外国語科の授業の中で、絵カードやデジタル教材などを使って英語の単語が導入され、発音練習をしたり、その単語を使ったスマールトークに参加したりする学習は、語彙の意図的学習であるといえる。授業の中で未知語に出会って繰り返し聞いたり、その語を使ってコミュニケーション活動をしたりすることにより、学習後の一時的な語彙知識ではなく、中学校での外国語科に繋がる語彙知識として、積み重ねていくことができているかどうかを確認する必要がある。

2.3 調査課題

本研究の目的は、小学生の英語語彙サイズの実態を明らかにし、外国語活動・外国語科の授業の中で言語活動を通して語彙を意図的に学習することの有効性を確認することである。先行研究でも報告されているカタカナ語の影響もあわせて調査し、語彙知識が発達する過程を観察する。調査課題は、次の2点である。

調査課題1：小学4年生と5年生の英語の受容語彙サイズはそれぞれ何語ぐらいか。

調査課題2：外国語活動における意図的学習により語彙知識は発達しているか。

3. 方法

3.1 対象者

本研究には、2019年9月、公立小学校4年生3クラスと5年生2クラスの計164名の児童が参加した。このうち、研究協力に関する保護者の同意が得られた4年生86名と5年生72名の合計158名分のデータを本研究の分析対象とした。4年生40名 (46.51%) と5年生52名 (72.22%) が、小学校での授業以外の英語学習経験 (学習塾、英会話教室、通信講座、テレビやラジオの英語講座、家族による教授など) があつた。

2018年度と2019年度は、新学習指導要領 (2020年4月施行) への移行措置期間であり、本研究の参加者である4年生は、2018年度 (3年生時) に年間35時間、2019年度は35時間のうち1

学期11時間、それぞれ*Let's Try! 1* と *Let's Try! 2* を使用し学級担任と英語が堪能な日本人講師と外国人ALTによる外国語活動の授業を受けていた。また、5年生は、2018年度(4年生時)に年間35時間、2019年度は50時間のうち1学期に16時間、それぞれ*Let's Try! 2* と *We Can! 1* を使用し、学級担任と日本人講師と外国人ALTによる外国語活動の授業を受けていた。いずれの学年でも、新学習指導要領に掲げられる目標と内容を視野に入れた授業が実施されていた。

3.2 受容語彙サイズテスト

児童の受容語彙サイズの測定には、リスニングによる「小学生のための語彙サイズテスト VER-I」(佐藤, 2019)の400語レベルと800語レベル各20問、計40問を使用した(付録1参照)。これは、佐藤(2018)において作成された「小学生のための受容語彙リスト」を基に開発されたテストで、解答方法は、英単語を2回聞いて、その意味として最も適する日本語の意味を4つの選択肢から選ぶという形式であった。具体的には、*Hi, friends!*の他、『英語ノート』、中学1年生用検定教科書など日本の学校教育で使用されていた教材や教科書、教室英語辞典9冊、絵本40冊、絵辞典(Picture Dictionary)6冊、英語母語児童用コース教材などの市販教材、英語母語児童用語彙リストをデータソースとし、頻度(Frequency)と使用範囲(Range)から算出された主成分得点を基準に重み付けして、同じ難易度の40問の受容語彙リストが2セット(VER-IとVER-II)作成された。

本研究で使用したテストは、実際に、小学生が受験したデータ(佐藤, 2019)を基に項目難易度の検証に基づいて、2セットの難易度の等質性の精度を高めるための調整がされた後のテストである。調整前のテストを公立小学校6年生46名に実施した佐藤(2019)における40項目全体の正答率は60.43%であった。また、江口(2020)では、この受容語彙サイズテストのVER-Iの800語レベルの20問を2018年度の5年生60名に実施した結果、正答数は正規分布しており、その正答率と文法性判断課題の正答率や模倣発話課題における文の再生率との深い関連性が実証的に示されていることから、小学生の言語知識を測るテストとして有効な方法であると考えられる。

3.3 実施手順

受容語彙サイズテストは、研究協力校である小学校との「小学生の英語力に関する基礎的研究プロジェクト」の一環として、コンピューター室にてクラス単位で授業時間内に校長先生と各クラス担任による支援のもと、筆者が実施した。パソコンで解答する模倣発話タスクを実施した後、解答用紙2枚と英語学習経験などに関するアンケート用紙1枚をセットして配布し、教室内のスピーカーを通してリスニング音声を一齐に流した。児童には、事前に「英単語を聞いて意味がわからない場合でも、この意味かなと思うものを必ず一つ選んでください。」という指示を出した。テスト実施の所要時間は約20分であった。

3.4 分析方法

「小学生のための語彙サイズテスト VER-I」で意味を問われた英単語40語が、外国語活動の授業の中で繰り返し聞いたり話したりする言語活動を通して意図的に学習をした語であるかどうかについては、実際に授業を担当した教員や講師に聞き取り調査を行った。2018年度の1年間と2019年4月から7月までの4か月間に学習した教材のUnitが対象となり(4年生は*Let's Try! 1*と*Let's Try! 2*、5年生は*Let's Try! 2*と*We Can! 1*)、テスト項目の40語のうち、4年生では

3語 (my, Wednesday, dinner)、5年生では12語 (前述の3語に加えて、math, clothes, July, math, bread, usually, subject, classroom, library) が授業内の言語活動を通して意図的学習を行った語であると判断した。

児童が日常生活の中で自然に (意図せずに) 触れている可能性があるカタカナ語 (借用語) は、次の手順で選定した。まず、(1) Daulton (1999b) で提案された高頻度借用語リスト (*List of High-Frequency Baseword Vocabulary*) と (2) 星野・清水 (2019) による「聞く語彙」のカタカナ語の定義 (*Let's Try! 1, Let's Try! 2, We Can! 1, We Can! 2*において頻度30以上の語で、カタカナ辞典3冊のうち2冊に掲載) (星野・清水, 2019, p. 129) に該当する語をリストアップした。次に、公立小学校で外国語活動・外国語科の授業を担当する日本語母語の専科教員と講師の計2名に、40語の中から「児童が日常生活の中でカタカナ語として触れる機会があると思われる語を選んでください」というアンケートに回答してもらった。(1) は子どもに特化した基本語 (借用語) リストではないこと、(2) も同様に、子ども向けのカタカナに配慮して編纂されているわけではないことを踏まえ、(1) と (2) に該当する語のリストに、外国語活動・外国語科の専科教員らの回答を反映させ、最終的に、計12語 (my, idea, cut, touch, hunter, strong, cook, festival, plan, spring, dinner, library) をカタカナ語と判断した (付録1参照)。40語のうちmyとhunterは (1) と (2) のいずれにも該当しなかったが、カタカナ語に含めた。2名の教員とも「カタカナ語」としてリストアップしており、前者は、近年、レジ袋の有料化に伴い「マイバッグ」という語が日常生活の中に定着するようになったこと、後者は、他の語に比べて高頻度語ではないが (『新JACET8000』基本語リストの順位2458)、対訳としての「狩人」よりも「ハンター」の方が児童の日本語の中により定着していることが理由である。それとは逆の理由で、(1) の基本語リストにあったsubjectとgiveの2語は、本研究のカタカナ語には含めなかった。

授業において言語活動を通して語彙を意図的に学習することの有効性を確認するために、語彙サイズテストにおける各項目の学習者ごとの正誤を従属変数とした。この従属変数に影響を与える要因について、授業内での意図的学習の有無の他、学年、カタカナ語であるか否かをそれぞれ固定効果とし、さらに参加者と項目による影響を考慮して変量効果に投入して、一般化線形混合モデルで分析した (R, ver.3.5.3, lme4パッケージ使用)。

4. 結果と考察

4.1 受容語彙サイズの発達

表1は、受容語彙サイズテストの学年別の記述統計を示す (正答数の満点は40、語彙サイズ

表1 受容語彙サイズテストの結果に関する記述統計

		平均値	標準偏差	最大値	最小値	95% 信頼区間
4年生	正答数	19.15	6.35	38	7	[17.81, 20.49]
(n = 86)	語彙サイズ	383.02	126.96	760	140	[333.17, 386.83]
5年生	正答数	26.14	6.25	39	15	[24.70, 27.58]
(n = 72)	語彙サイズ	522.78	125.13	780	300	[493.90, 551.66]

の上限は800)。4年生の平均は383.02語 ($SD = 126.96, Max. = 760, Min. = 140$) であり、これに対し、5年生の平均は522.78語 ($SD = 125.13, Max. = 780, Min. = 300$) であった。正答率の平均値は、4年生が47.88%であるのに対し、5年生は65.35%であった。両学年グループの正答数・語彙サイズの95%信頼区間は重なっておらず、語彙サイズは、5年生の方が4年生よりも全体的に有意に大きいといえる。また、図1は、学年別の受容語彙サイズのヒストグラムである。シャピロ・ウィルク検定により、4年生と5年生の語彙サイズはともに正規分布していることが確認できた (4年生: $W = .98, p = .24$, 5年生: $W = .97, p = .09$)。

5・6年生の外国語科において、学習指導要領に示されている、聞くこと・読むこと・話すこと (やりとり・発表)・書くことについて、受容語彙と発表語彙を合わせて600~700語程度の語を扱い、活用できるようになることが目指されているが、5年生は外国語活動から外国語科への移行期間中の50時間のうちの16時間学習した段階で、72名中24名が受容語彙の推定語彙サイズが600語に達していた。2020年4月からの新学習指導要領の施行に伴い、授業時間数も増えることから、「学習語彙をしっかりと選定し、明確なイメージを持って指導計画を立て」(文部科学省 a, 2018, p.90)、1年半後の6年生3月までに、どの児童にとっても中学校での英語学習の土台となるように、600~700語以上の語を聞いて意味を理解できたり知識として身に付けた語彙を使って話したりできるようになることが期待される。

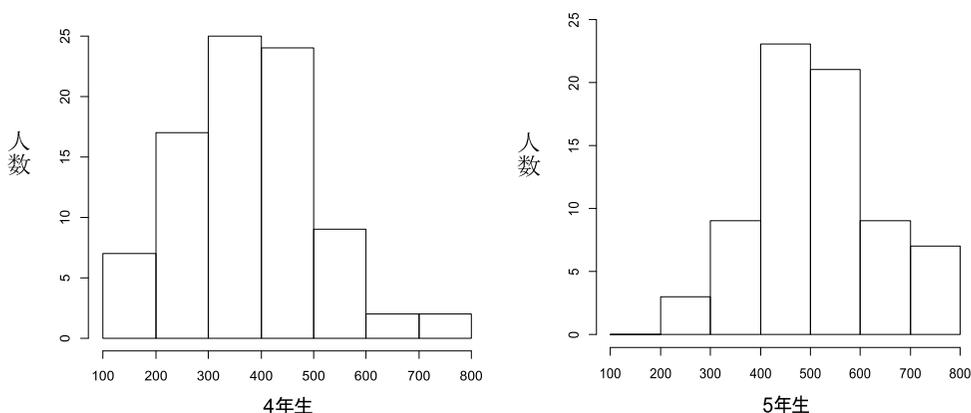


図1 学年別 英語受容語彙サイズの分布

4.2 意図的学習の有効性

表2は、受容語彙サイズテストにおける各項目の学習者ごとの正誤を従属変数として、学年、授業における意図的学習の有無、日常生活の中で触れるカタカナ語であるかどうかの3変数を固定効果、また、参加者と項目を変量効果に仮定した場合の一般化線形混合モデルによる固定効果のパラメータを示す。3つの固定効果は、いずれも語彙知識 (語彙サイズテストにおける正誤) に与える影響が有意であった。つまり、4年生よりも5年生の方が全体的により多くの語彙知識を身に付けていること、授業での言語活動を通して意図的学習をした語は、知識としてより身に付いていたことが実証された。

さらに、日常生活の中でカタカナ語として触れている語は、授業における意図的学習の有無にかかわらず、カタカナ語でない語よりも習得しやすいことも確認された。児童にとって、日常生活の中で触れる機会のあるカタカナ語の正答率が高い傾向にあるという結果は、小学生を

表2 一般化線形混合モデルによる語彙知識に関する固定効果のパラメータ

	推定値	標準誤差	有意確率
切片	-0.50	0.21	.02
学年 (4年生/5年生)	0.76	0.15	$p < .001$
意図的学習の有無	1.20	0.15	$p < .001$
カタカナ語か否か	0.98	0.36	.003

対象にした笠原他 (2012) や中学1年生を対象としたSato (2017) と同様であった。

本研究においてカタカナ語であると判断した12語のうち10語は、正答率が各学年の全体の正答率 (4年生: 47.88%, 5年生: 65.35%) を上回っており、6年生では、外国語活動の授業で未習であっても正答率が100%の語 (touch) や90%以上の語 (cut, idea) があった。授業で取り扱うことがなくても、日常生活における偶発的学習により知識として身に付いた典型的な例であるといえる (付録2参照)。

また、児童は、学年が上がるにつれて認知的に発達することに加えて、外国語学習の累計時間数が増える。これにより、外国語活動の授業内外で遭遇する語の種類 (type) も増え、結果的に遭遇する総語数 (token) も増えていくため、4年生よりも5年生の方が全体的に語彙サイズが大きいうことは、順調に発達している結果であるといえる。

最後に、外国語活動の授業における意図的学習の有効性について考察する。表3は、4年生にとっては未習であるが5年生では授業で扱われたという9語について、4年生と5年生の正答率の平均値とその学年差を示している。4年生と5年生の正答率を横断的に観察してみると、math, July, nurse, subject, classroom, libraryの6語は、正答率が顕著に伸びていた。その中でも、math, nurse, subject, classroomの4語は、5年生での正答率が90%以上であり、特に、mathの正答率は、4年生は32.56%であるのに対し5年生は98.61%であり、その差は66.05%であった。同様に、subjectの正答率も、4年生は31.40%であるのに対し5年生は90.28%であり、58.88%の差があった。これら6語に共通する特徴として、いずれの語も児童の日常生活の中に身近にあるものであることが挙げられる。それに加えて、新学習指導要領への移行期間が開

表3 5年生でのみ意図的学習をした語の各学年における正答率

	A: 4年生 (%)	B: 5年生 (%)	B-A (%)
math	32.56	98.61	66.05
July	24.42	77.78	53.36
clothes	51.16	56.94	5.76
nurse	69.77	94.44	24.68
bread	55.81	70.83	15.02
usually	25.58	26.39	0.81
subject	31.40	90.28	58.88
classroom	59.30	98.61	39.31
library	48.84	73.61	24.77
40項目平均値	47.89	65.35	17.47

始された2018年度から、研究協力校である小学校において、徐々に授業に取り入れてきたスモールトークでもよく使われていた語も含まれている。

これに対し、clothesとusuallyの2語の正答率は、4年生と5年生でほとんど変化がなかった。具体的には、clothesの正答率は、4年生が51.16%であるのに対し5年生は56.94%であり、その差はわずか5.76%であった。同様に、usuallyの正答率は、4年生が25.58%、5年生が26.36%であり、その差はわずか0.81%であった。つまり、これらの語は、各単元では繰り返し聞いたり話したりする活動を通して意図的学習を行ったにもかかわらず、多くの児童が知識として身に付けていなかった。この理由として、学習した単元でのみ触れていた可能性、つまり、触れる頻度が少なかった可能性が考えられる。さらに、2つの語の特徴に目を向けると、clothes /klóuz/ については、close /klóuz/ と同音であるため、音声提示された時により親密度の高いcloseを想起したために適切な解答が選択できなかったという可能性が考えられる。また、usuallyについては、同じ単元で頻度を表す別の副詞 (always, sometimes) とともに学習しており、4年生、5年生の段階では、抽象的な現象を表す言葉は、具体的な現象や物をあらわす言葉に比べると概念化が難しいということも知識として定着しなかった一つの理由として考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、新学習指導要領 (文部科学省, 2018 a) への移行装置期間中の小学4年生と5年生計158名を対象に、英語の受容語彙サイズテストの結果を分析し、外国語活動の授業における言語活動を通じた語彙の意図的学習の有効性についての検証を行った。その結果、4年生の平均語彙サイズは383.02語 (range: 140-760) であったのに対し、5年生の平均語彙サイズは522.78語 (range: 300-780) であり、児童の語彙サイズは、4年生から5年生へと学年間で横断的に伸びていることが確認できた。さらに、一般化線形混合モデルによる分析から、児童の語彙の発達は、日常生活の中でカタカナ語として頻繁に出会うことによる偶発的学習の影響も、外国語活動の授業における意図的学習の影響も受けており、2つの異なる語彙学習の方法は、語彙の発達に重要な役割を担っているといえる。とりわけ、児童の生活の中で身近にあるものを表す語は、授業における意図的学習により、英語の語彙知識として身に付けているという傾向が顕著であった。その一方で、授業において意図的学習をしたにも関わらず、多くの児童が知識として身に付いていないという語もあった。語彙知識の定着が難しい語は、触れる頻度が少ないことや概念化が難しいことその他に、より親密度の高い同音異義語を持つことによる影響を受けている可能性が考えられた。

小学校の外国語科では、600-700語を扱うという語彙学習に関する具体的な数字が示されたが、児童は授業で意図的に学習した語以外にも、日常生活の中で偶発的に習得している語がある一方で、授業で扱っても習得が難しい語もある。本研究の結果を踏まえて、教育的示唆を述べるとすれば、指導者は児童にとって習得が難しい語の傾向や特徴を把握し、単元で学習した後も、教師によるスキットや児童が行うスモールトークに組み込むなどして、繰り返し触れることができる場面を設定することが望ましいといえる。また、概念化しにくい抽象名詞や形容詞や副詞などは、その意味を具体化してイメージできるように、語彙の導入時にオーセンティックな視覚的補助教材を用いたり、実際にその語を使用している場面を見せたり児童が使用する

必然性のある場面を積極的に設定するなどの配慮が必要であろう。

本研究では、新学習指導要領への移行措置期間の小学4年生と5年生の英語受容語彙サイズを測定した。この結果を、テスト項目全体の正答率で学年間比較をすると、4年生が47.89%であったのに対し、5年生は65.35%であった。このうち、5年生の結果は、ほぼ同じ項目の受容語彙サイズテスト（難易度の均質性のための精度調整前）を6年生に実施した佐藤（2019）の正答率（60.43%）よりもやや高かった。これには様々な要因が絡んでいることが予想される。異なる学校間での比較であり、その要因を特定することはできないが、佐藤（2019）に参加した6年生は、*Hi, friends!* を使った外国語活動が週1回程度であったのに対し、本研究に参加した5年生は、新学習指導要領への移行措置期間にあり、外国語活動の学習時間がやや多かった。もし学習時間数が一つの要因であるならば、2020年度より、小学3年生からの4年間で累計210時間の外国語活動・外国語科を経験した小学生は、より多くの語彙を知識として身に付けていくことが期待できる。

今後、外国語活動・外国語科における語彙学習が中学校の外国語科への土台作りとなり、小学校から中学校へスムーズな接続を目指していくためには、さらなる調査が必要である。第一に、本研究における小学生の語彙サイズの発達に関する分析は、学年間の横断的データに基づいたものであるが、本来、学習者の言語発達は、縦断データに基づいて議論されるべきである。4・5年生が5・6年生に進級した後の語彙サイズも継続して測定し、その発達と意図的学習の有効性を確認する必要がある。第二に、本研究では、妥当性や信頼性が確認されている小学生向けの受容語彙サイズテストを利用して調査を行ったが、小学校外国語科では、コミュニケーション活動を通して「知識」を実際に活用できる「技能」として身に付けていくことも求められており（学習指導要領, 2018 a）、今後は、産出語彙サイズや実際のコミュニケーションの場面での使用語彙についての調査も必要になってくる。

謝 辞

本研究に協力してくださった小学校の児童の皆様や先生方に心より感謝いたします。本研究は、JSPS科学研究費（基盤研究（C）、課題番号19K00811）、名古屋女子大学 教育・基盤研究（課題番号31K09）の助成を受けています。

引用文献

- 相澤一美（2014）. 「第6章 1. 語彙学習法」全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌編集委員会編『英語教育の今—理論と実践の統合—』全国英語教育学会.
- Bialystok, E., & Feng, X. (2011). Language proficiency and its implications for monolingual and bilingual children. In A. Y. Durgunoğlu & C. Goldberg, *Language and Literacy Development in Bilingual Settings* (pp. 121-140). New York: The Guilford Press.
- 大学英語教育学会基本語改訂特別委員会（2016）. 『大学英語教育学会基本語リスト新JACET8000』東京：桐原書店
- Daulton, F. E. (1999a). English Loanwords in Japanese -- The Built-In Lexicon. *The Internet TESL Journal*, 1.
- Daulton, F. E. (1999b). List of high-frequency baseword vocabulary for Japanese EFL students. *The Internet TESL Journal*, 7.

- Eguchi, A. (2011). *The role of teacher talk adjustment in interaction in English with elementary school students*. Unpublished MA thesis. Graduate School of Education, Aichi University of Education, Japan.
- 江口朗子 (2020). 「模倣発話課題と文法性判断課題による小学5年生の英語の統語構造に関する知識の測定 - 結果に影響を与える要因分析 -」『小学校英語教育学会会誌 (JES Journal)』第20巻, 304 - 319.
- 星野由子・清水遙 (2019). 「小学校外国語・外国語活動で扱われるカタカナ語—日本語と英語の語義の比較分析を通して—」『小学校英語教育学会会誌 (JES Journal)』第19巻, 117 - 129.
- 笠原究・町田なほみ・長田恵理・高梨庸雄・吉澤小百合 (2012). 「小学校5・6年生の語彙知識: 音声, 意味, 文字の結びつきに関して」『小学校英語教育学会会誌 (JES Journal)』第12巻, 90 - 101.
- Kasahara, K. (2017, March). Seven principles for teaching and learning vocabulary in EFL situations. シンポジウム: 「日本人英語学習者の語彙およびフォーミュラの習得をいかに促進させるか」JACETリーディング・英語語彙・英語辞書研究会合同フォーラム. 早稲田大学. 発表資料.
- 望月正道 (1998). 「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」『語学教育研究所紀要』第12号, 27 - 53.
- 文部科学省 (2018a). 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語編』東京: 開隆堂.
- 文部科学省 (2018b). 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語編』東京: 開隆堂.
- Nation, I. S. P. (2013). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press.
- Sato, T. (2017). Measuring vocabulary size of Japanese junior high school students: Cross-sectional and longitudinal viewpoints. *JLTA Journal*, 20, 90 - 106.
- 佐藤剛 (2019). 「小学生のための語彙サイズテストの開発」『小学校英語教育学会会誌 (JES Journal)』第19巻, 130 - 145.
- 佐藤剛 (2018). 「小学生のための受容語彙リストの開発」『小学校英語教育学会会誌 (JES Journal)』第18巻, 36 - 51.
- Stæhr, L. S. (2008). Vocabulary size and the skills of listening, reading and writing. *The Language Learning Journal*, 27, 139 - 152.

付録1 学年別・項目別 カタカナ語・意図的学習の有無・正答率

		カタ カナ語	4年			5年		
			意図的 学習	正答数計 (n = 86)	正答率 (%)	意図的 学習	正答数計 (n = 72)	正答率 (%)
1	my	✓	✓	69	80.23	✓	65	90.3
2	idea	✓		74	86.05		66	91.7
3	cut	✓		80	93.02		67	93.1
4	math			28	32.56	✓	71	98.6
5	dictionary			59	68.60		57	79.2
6	July			21	24.42	✓	56	77.8
7	Wednesday		✓	65	75.58	✓	63	87.5
8	touch	✓		72	83.72		72	100.0
9	hunter	✓		53	61.63		64	88.9
10	strong	✓		29	33.72		34	47.2
11	clothes			44	51.16	✓	41	56.9
12	nurse			60	69.77	✓	68	94.4
13	or			51	59.30		45	62.5
14	cook	✓		55	63.95		52	72.2
15	set			48	55.81		56	77.8
16	festival	✓		42	48.84		52	72.2
17	way			41	47.67		48	66.7
18	dinner	✓	✓	68	79.07	✓	63	87.5
19	doll			59	68.60		57	79.2
20	plan	✓		19	22.09		32	44.4
21	of course			57	66.28		51	70.8
22	bread			48	55.81	✓	51	70.8
23	spring	✓		32	37.21		30	41.7
24	but			28	32.56		41	56.9
25	where			23	26.74		30	41.7
26	phone			21	24.42		10	13.9
27	usually			22	25.58	✓	19	26.4
28	subject			27	31.40	✓	65	90.3
29	understand			44	51.16		42	58.3
30	late			27	31.40		30	41.7
31	classroom			51	59.30	✓	71	98.6
32	vet			32	37.21		43	59.7
33	other			17	19.77		24	33.3
34	library	✓		42	48.84	✓	53	73.6
35	give			28	32.56		43	59.7
36	pretty			32	37.21		29	40.3
37	stay			21	24.42		30	41.7
38	think			19	22.09		32	44.4
39	before			14	16.28		29	40.3
40	know			25	29.07		30	41.7

付録2 学年別・項目別の正答率

